

つがるの昔っこ (昔話) ②

龍神様のお礼

(標準語Ver.)

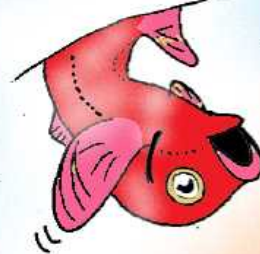
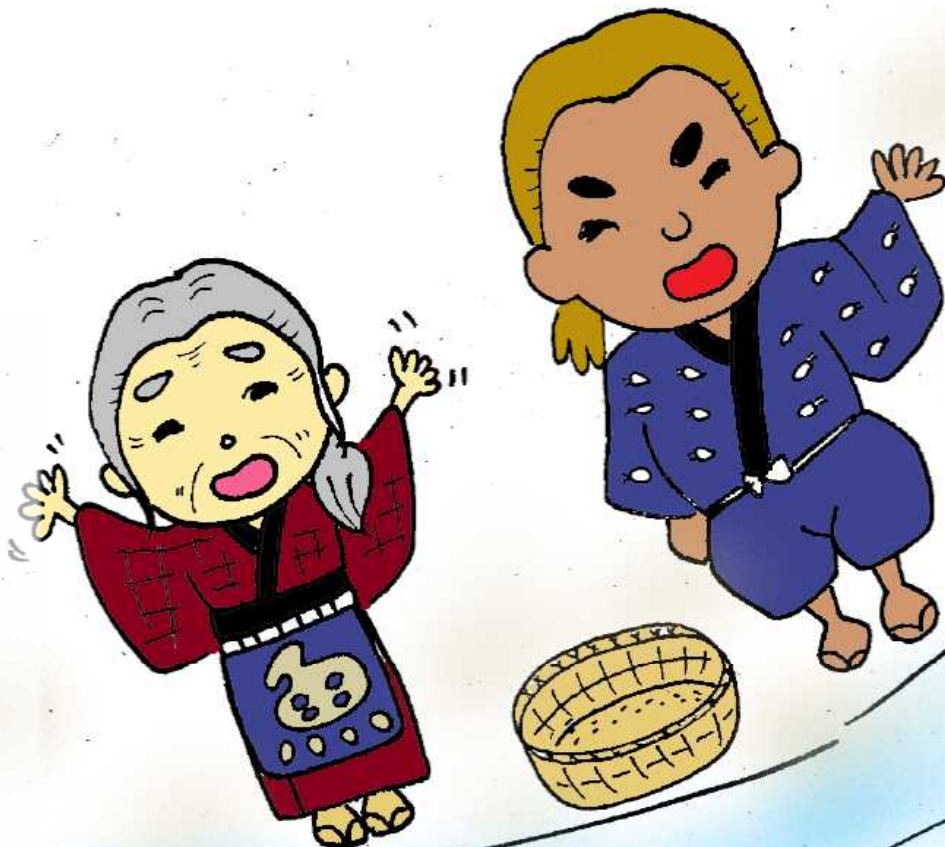


国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

昔、ある小さな漁村の村の外れに1人の男と母親がおりました。この男は働き者で、一生懸命稼いで母親を養っていました。



2人とも、病気一つせず毎日暮らしている分の魚を海から恵んでもらっているので、男は漁が終われば、その日の捕れた魚の中で、一番良いのを選び「これは龍神様に捧げます」と言って、海に戻すそうです。

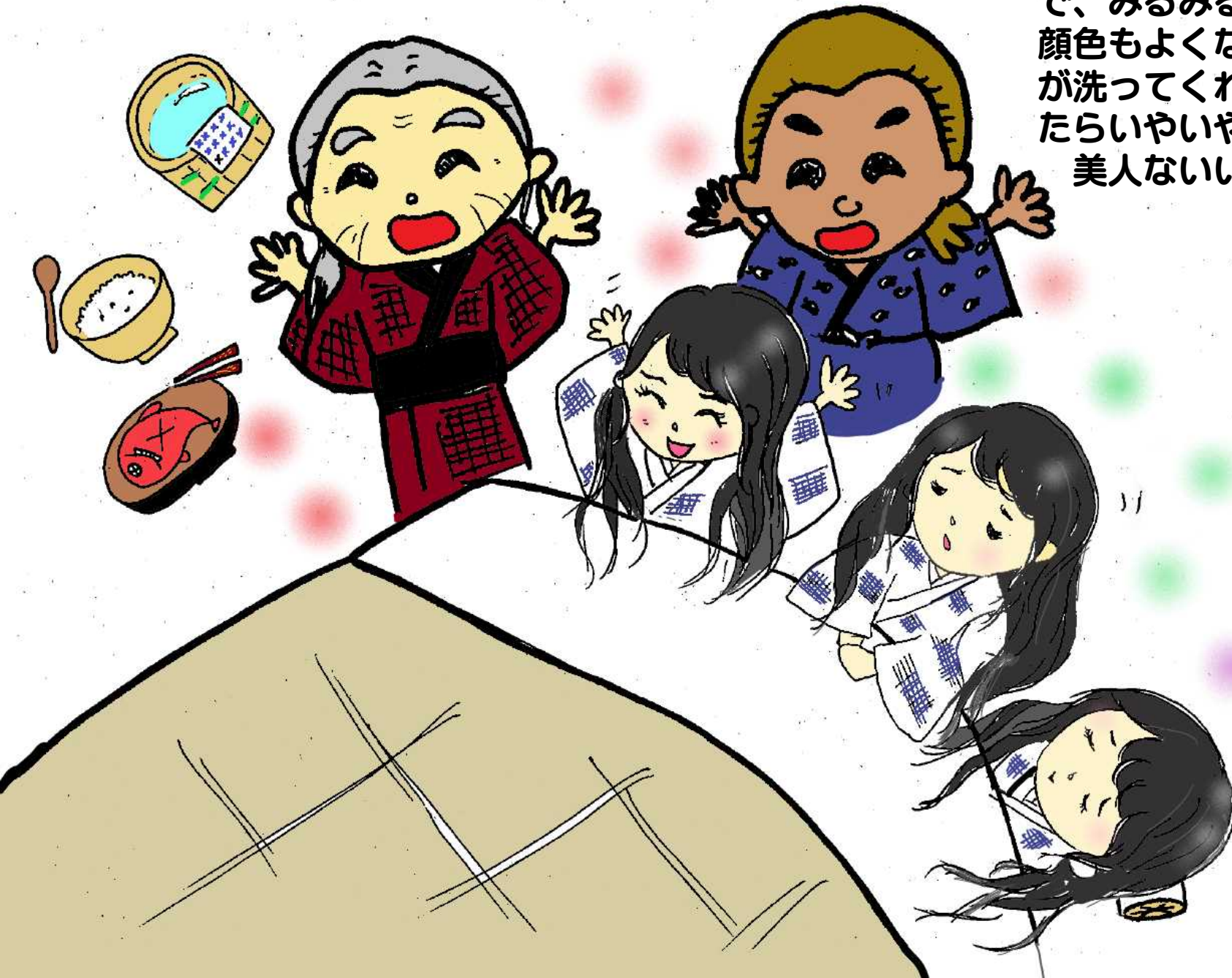


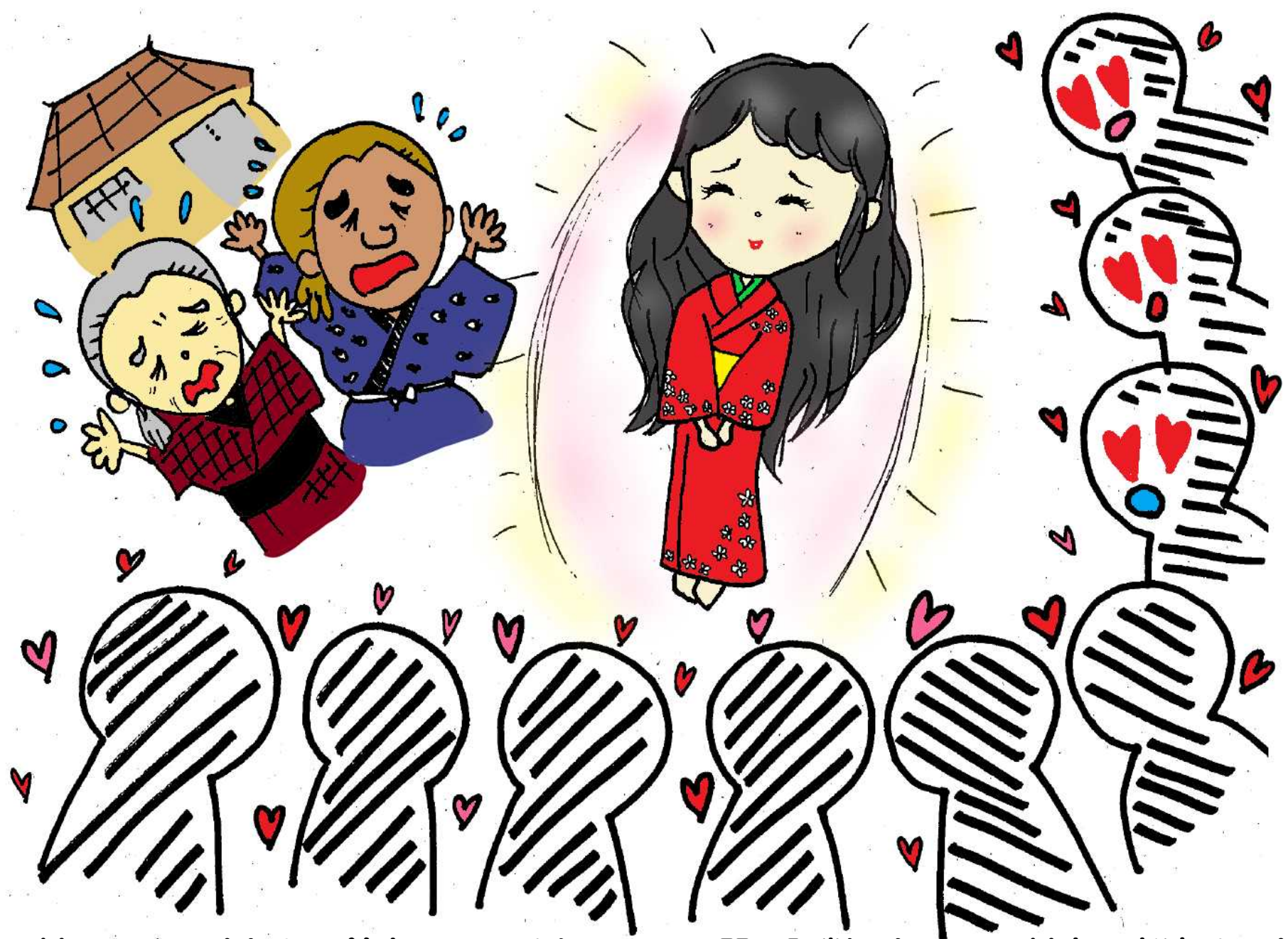


毎日そうやって龍神様に捧げ物をして、今日も戻り際に海を拝んでから浜にあがったところ、浜の松の木の下にきれいな娘が倒れていました。

見たことの無い娘でしたので、「おいおい、どうしたんだい？気分でも悪いのかい？あんたはどっからきたんだい？」と聞くと「私、ずーっと遠くの海の向こうから旅をしてきたんですけど、長旅で疲れて、倒れてしまいました。お願いします、どうか一晩泊めてください」と言いました。「私の家は汚いあばら屋だけど、それでもいいなら泊まっていきな」と言い、娘に方を貸して連れて帰りました。

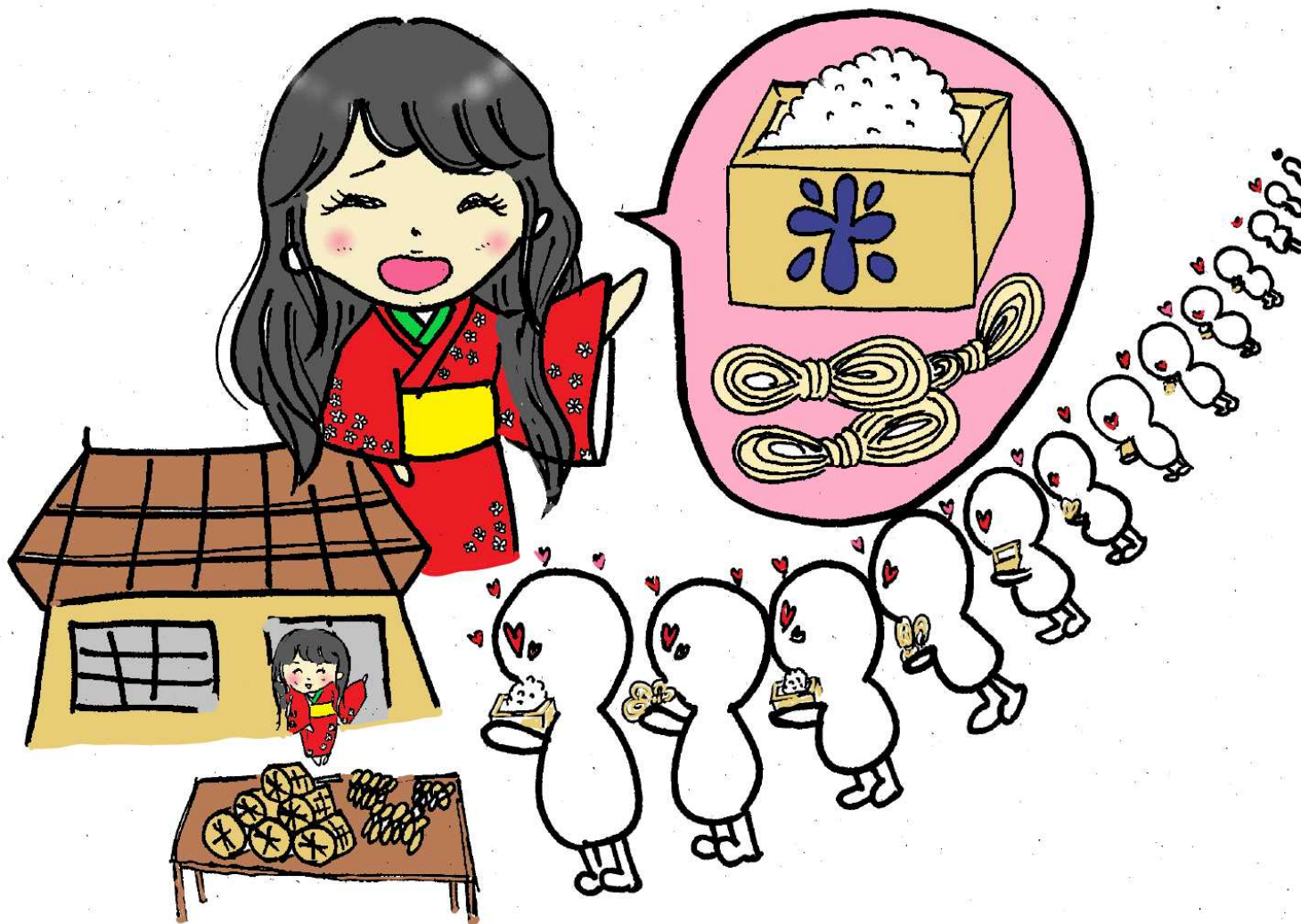
母親は突然の若い娘の客に驚き、布団を敷き、熱いお粥を作り食べさせました。娘はよほど疲れがたまっていたとみえて、次の日もその次の日も寝たままでした。母親は付きっきりで看病し、男のとってくる新鮮な魚を煮て食べさせました。4、5日過ぎたあたりで、若い娘なもので、みるみる元気になり床を上げ、顔色もよくなり、髪も梳き、母親が洗ってくれた着物をキリッと着たらいやいや、これまたどうして美人ないい娘でした。





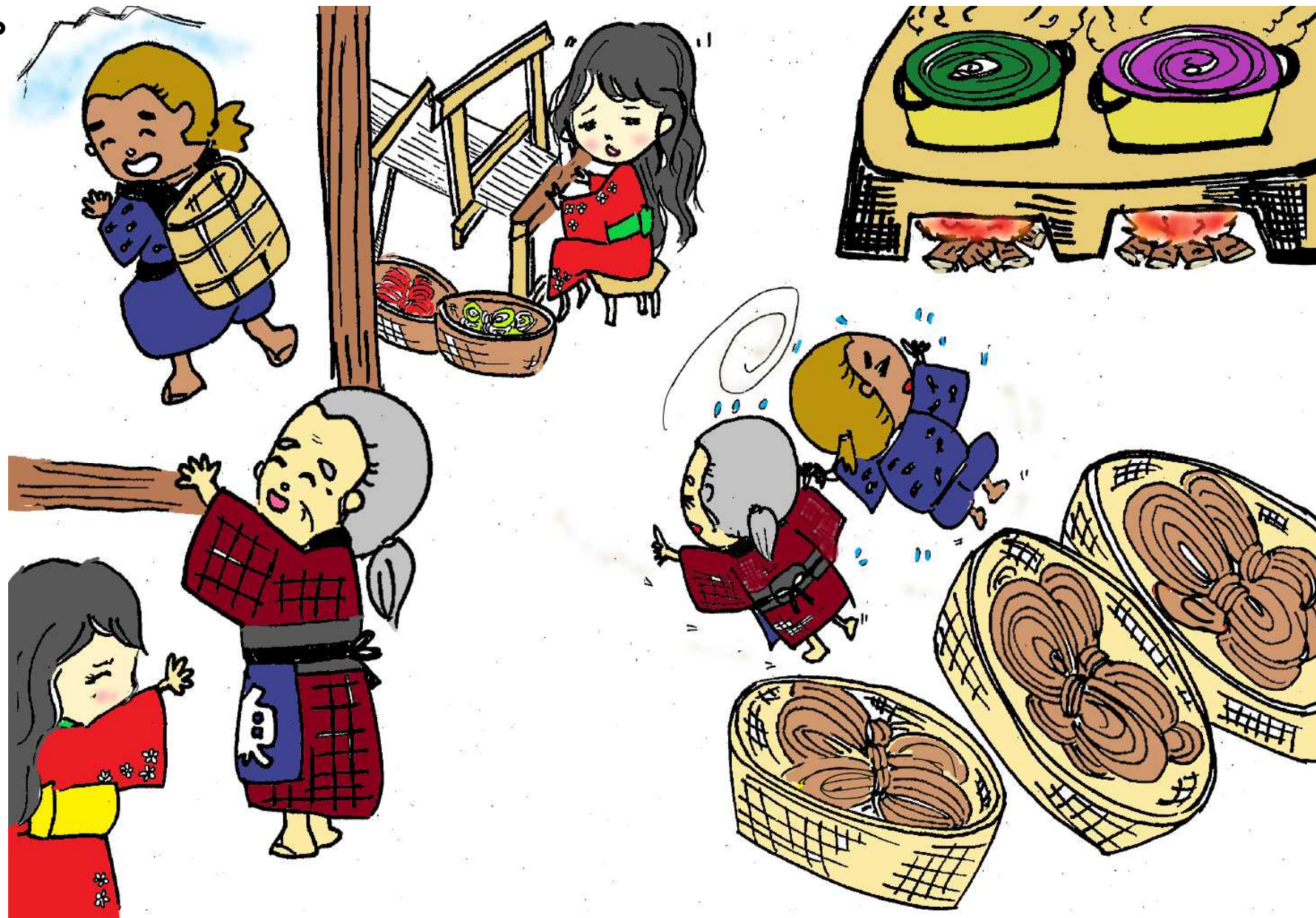
小さい村のことですから、美人のことはあっという間に評判になって、村中の者達は元より、隣村や遠くの村からでも娘を見たいということで来る人がいました。娘はあんまり自分のことは語りたがらなかったのですが、名前を聞くと「波と言います。」と答えました。評判が評判を呼び、毎日毎日娘を見に人が集まってくるもので男も母親も困ってしまいました。

そうしたら、波は「私を見たいのなら。麻糸一巻きに米一合持ってきた人であればあってもいいです。」と言ってそれを母親に触れさせたんだそうです。人の気持ちはおかしいもので、只で見せると言うよりも、見たいなら物を持ってこいと言った方が、一層好奇心をかき立てるんでしょう。



今度は麻糸と米を持ってくる人が列をなしたそうです。戸口の前の台の上に、麻糸と米を置けば、波は戸口の掛けむしろをくるくるめくってにつこり笑い「ありがとうございました。」と玉を転がすような良い声で一言しゃべって、また、ニコツとするのでむしろがおりてからでも、そこを見た人は、しばらくぼーっとするんだそうです。そんなもので、何日もたたないうちに麻糸は山のように集まりました。

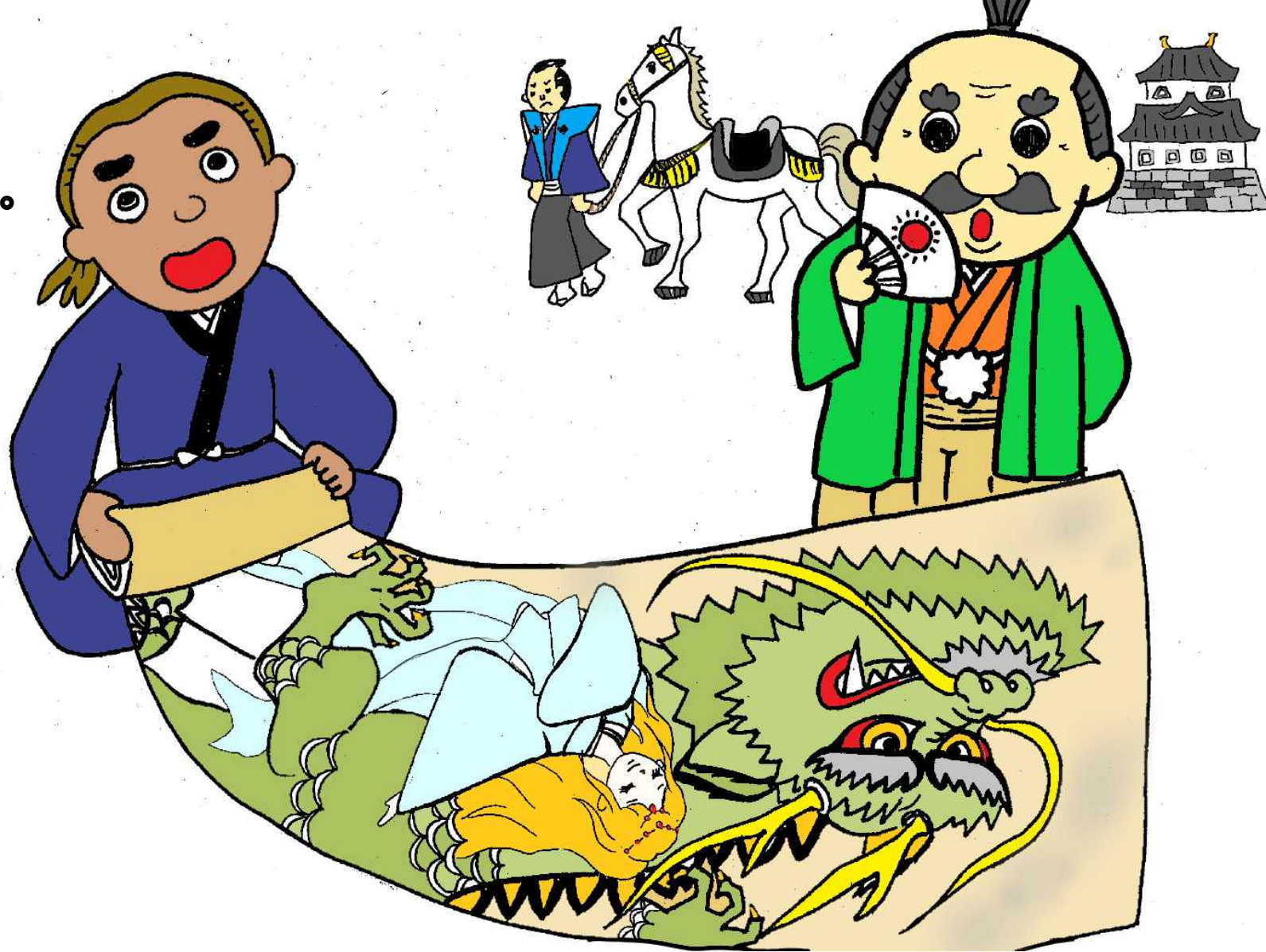
波は、男に頼んで山に行ってもらい、あの草、あの花と、いろいろな草花を集めてもらいその煮汁で麻糸を様々な色に染めました。そして、その麻糸が染め上がったところで、「お母様、私にその物置を貸して下さい。」と言い、物置に入り一日中はたを織っていました。母親も男も、織っている物を見たくてそばに行こうとすると、波は笑いながら首を振り「これが出来上がれば真っ先にお二人に見せるので、出来るまで見に来ないでください。」と言うので、二人は毎日そわそわしていました。



春が来て、夏が過ぎて、秋になったある晩、波は「出来ました」と物置から出てきました。波がその織物を開いてみせると、それは大きく見事な龍の模様と、その龍の上に綺麗な衣装を着た女の模様が織り込まれていました。その織物は見事な出来映えなもので、2人は声もなく、ため息をついて眺めていました。すると、波は男に向かって「お兄様、これを持って明日街に行って売ってきてくださいませんか？値段は百両です。」と言いました。



男はそれを聞いてびっくりしたものの、次の日の朝に言われたとおり、織物を担いで街に売りに行きました。街の人たちはその見事な織物を見て、みんなため息をつき欲しい欲しいと思いましたが、なにしろ、百両という大金です。誰も買う人はいません。そのうち夕方になりました。



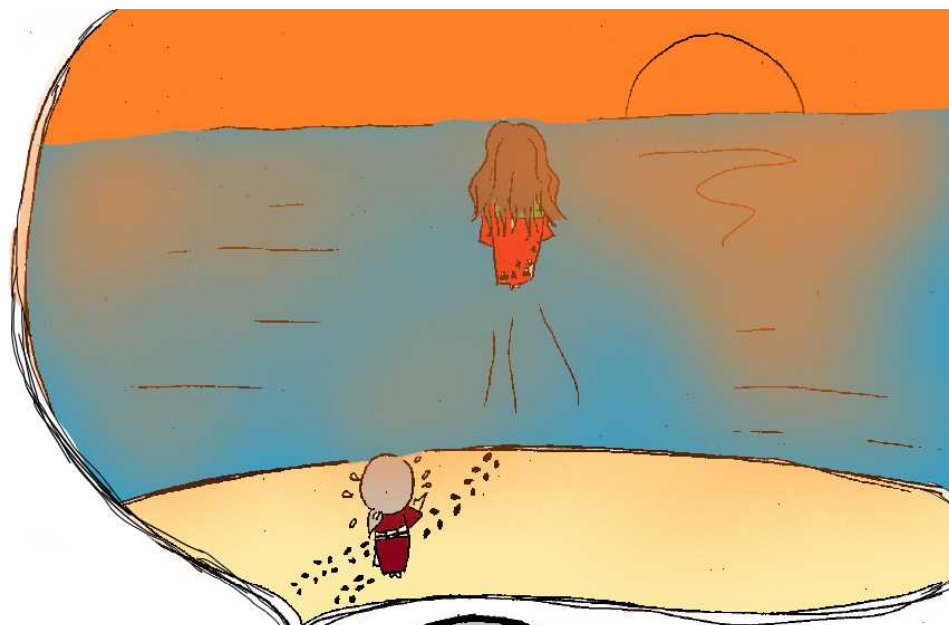
そこへ、立派な馬に乗り家来を従えた殿様が通りかかりました。人だかりを見て、寄ってみると、これまで見たこともない見事な龍の模様の織物が置いてありました。殿様は辰年の生まれでしたので、すっかりこの織物を気に入ってしまいました。「これこれ、これは売り物であるか？」
「はい、さようでございます。」「値はいかほどじゃ？」「はい、えー、百両でございます。」
「うむ、百両か。ならば余が求めてつかわす。今は遠乗りの帰り故、持ち合わせがない。一緒に屋敷まで同道致せ」と言いパカパカと歩き出しました。

お屋敷に着き、その織物を壁に掛けて見たところ、街の通りに広げておいたときよりも、一層立派に見え、龍は今にも天に昇りそうであり、龍の上の娘の顔は神々しく輝き、まるで乙姫様のようなでした。殿様は「ウム」とうなり、じーっと眺めていましたが、それから一言「見事じゃ」と、満足そうにして、おつきの者に「値を払ってつかわせ」と言い百両くだされました。男も改めて掛けた掛け軸を見ると、内心びっくりしました。その織物の娘の顔は、見れば見るほど、今、家にいる波の顔とそっくりであったのです。

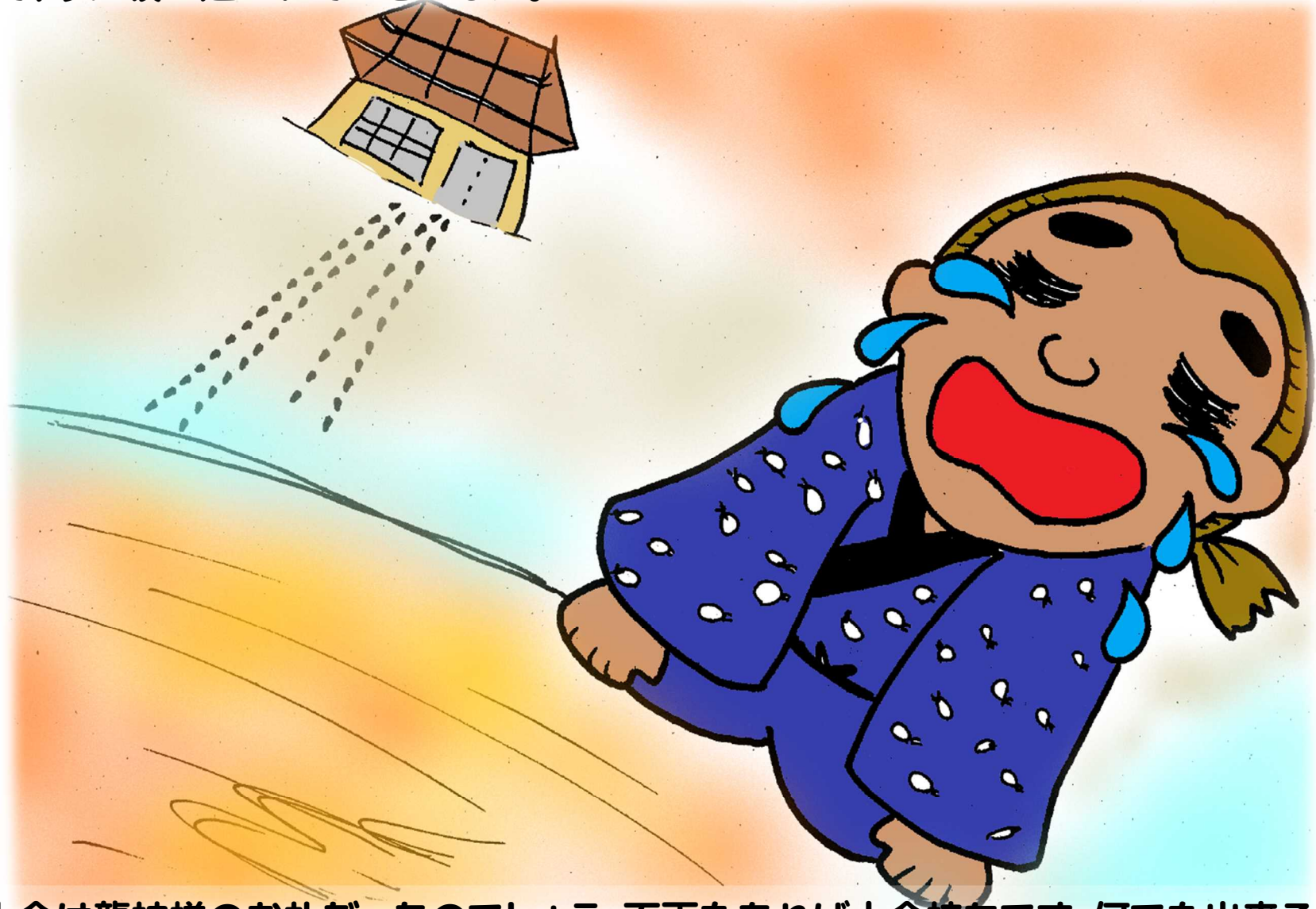


男は急いで家に走って戻りました。「波、波はいるか？」家に入ると、母親だけ一人、パワーとして座っていました。

男は「波はどうした？」と聞くと母親が急に涙をポロポロと流して「さっき私と二人で浜に行ったのよ。そうしたら、波は「お母様、長い間お世話になりました。おかげさまですっかり元気になりました。今日ここでお別れしたいと思います。大変楽しい日々でございました。お別れするのは私も辛いのですが、どうしても帰らねばなりません。くれぐれもお兄様によろしくお伝え下さい。」って言って海の上をスタスタと歩いて沖の方まで行ってしまったのさ。波はきっと、神様のご化身だったのではないか、..」



それを聞いた男は、ドッと飛び出して浜へ走った。家から二つの足跡が波打ち際まで続き、そこから一つの足跡は海の方へ消えていました。男は「なみー なみー なみー」と声がかかるまで叫びましたが、波はもう居ない。丁度沈んでいく、真っ赤な夕日に照らされた男の目に、涙トポトポと溢れて、ポタッ ポタッと落ちて、砂に吸い込まれていきました。



百両の大金は龍神様のお礼だったのでしょうか。百両もあれば大金持ちです。何でも出来るし、何でも買える。しかし男は貧乏でもいい。それより波と暮らしたかったのではないのでしょうか？

お・し・ま・い